校舎裏のツギハギ感

一筆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
校舎裏のツギハギ感

【Ｎコード】
Ｎ６９８３Ｘ

【作者名】
一筆

【あらすじ】
校舎裏で野球部マネージャーの池端さんが頭から血を流して倒れていた。投球練習中の事故であるかのように見えたが、私の部活仲間で友人の克磨は、彼女を故意に重症たらしめた犯人がいると言いはじめた。

一

部室のドアを開けると、そこにはいつも通りの風景が広がっていた。

そこらに出しっ放しの椅子。掃除の途中のままで片されていない机。山を崩して散らかったままの書類。箱から溢れて転がったままの軟式野球ボール。

椅子三つを使って仰向けに寝ている武登克磨（むとかつま）。

私はそれを見て深呼吸を一度して、肩からかけていたカバンを手に持った。

「放課後からいきなり何しとるんじゃ！」

思い切りカバンを克磨の腹に放り投げた。グヘッ！　と叫んで、克磨は椅子のベッドから転がり落ちた。

「……暴力女」

よろよろ立ち上がって克磨は呟く。私は克磨とともに転がった自分のカバンを拾い上げて机の上に置いた。

「今まで期末対策を友達としてきた私に対して、呑気気ままに寝ていた君が悪い」

「うるせえ。オマエの都合をボクに押しつけるな」

私と克磨は向かい合うように椅子に座り直した。克磨は右膝を立てて摩っていた。ぶつけたらしい。摩る仕草がおかしい。

「何笑ってんだよ？」

頬が緩んだのを目ざとく指摘された。

「なんでもないよ」

克磨はフンッとそっぽうを向いた。だから、そういう仕草が笑いのつぼなんだって。

「オマエ、本当に気味悪いぞ」

あからさまに椅子を引いて、わたしから距離をおいた。心なしか傷付いたが、克磨にそんなことをいちいち文句たれても仕方がない。

「というよりさ、君はこの時期に部室で昼寝してるって、いったい何者だよ？　必死に勉強してろよ」
埒のあかない話をしているのもなんだから、話題をかえた。
「どんな時期の話をしてるんだ、オマエは？　まだテスト一週間前じゃないか。必死になる方がどうかしてる」
ハラタツ。
「くたばればいい」
「はいはい」
呆れたように克磨は溜息をついた。
「ところで、オマエは何しにきたんだよ？」
いったん座った椅子から立ち上がって克磨は聞いてくる。そのまま床に散らばった書類を集めはじめた。私はそれを手伝うことにした。
「何しにって、テスト勉強をしにだよ。家だと集中できないから」
「さっきまでお友達さんとしてたんじゃないのか？　そこまでオマエはまずいのか？　ご愁傷様だな。赤点で卒業できませんでしたなんてことにならないようにしろよ」
私は厚さ一ミリほどになった書類の束で克磨の頭をはたいた。
「言い返せなくなると腕力に訴えるのは、女の子としてどうかと思うぞ」
「男女平等」
「じゃあ、ほれ」
と、克磨も書類の束で私の頭をはたいた。
「女の子に手を上げるなんて！」
とりあえず女の子らしい反応を見せてみるが、「男女平等」と予想の範囲内の答えが返ってきた。
「そんなことより、外、騒がしくないか？」
窓の方を向いて克磨は言った。耳を澄ますと、人の怒鳴り声が聞こえてきた。
「見にいってくる」

いつもは自分から動こうとしない克磨が、それでも大儀そうではあるが立ち上がり、私のことなんて待たずに部室を出ていった。仕方ないから私は彼のあとを追った。

二

騒ぎのもとは、人気など建築当初から期待されていないという感じの校舎裏にあった。校庭から校舎とフェンスのあいだの一本道を抜けていった先にある。

校舎裏は不思議な場所だった。校舎とフェンスに囲まれた長方形の空間で、フェンス沿いに茂った木々の葉の隙間からこぼれた陽が、細々と地面を照らしている。なぜか野球部が練習でよく使っているバッティングネットが一つあり、その周りに硬式ボールが散らばっていた。中には、遠くへ転がっているボールもある。

バッティングネットの前に人が集まっていた。集まっていたのは野球部の人たちだった。白いユニフォームが、校舎の影と初夏の陽射しの中にむごむごと浮かんでいた。

克磨は人だかりの外にいて、私のことに気付くと近寄ってきた。

「なんでもない。帰るぞ」

ぶっきらぼうにそう言うと、私の手を引いて今来た道を戻ろうとした。素直に従いはせず、私は踏ん張ってその場に立ち続けた。私の手を引く克磨の力が増した。それになお歯向かって、人込みへと目をやった。人と人の隙間から、彼らが何を問題にして集まっているのかが覗けた。

彼らの中心で、野球部の帽子を被ったジャージ姿の女の子が倒れていた。垣間見えた彼女の右側頭部から血が流れ、彼女の頭部周辺の地面に赤い円が描かれていた。陽で照る砂の白と、木陰で陰る黒が彩る校舎裏の地面に、一箇所だけ赤色のグラデーションが施されていた。

「いったい、何があったの？」

誰に問うわけでもなく、私は呟いていた。いやそれは克磨に問いかけたものかもしれない。克磨なら、私の問いぐらい簡単に答えられると思ったから。

「わからない。けど、まだだ」
声の方を向くと、克磨は無表情に張りついた目で私を見ていた。
克磨の言うことを聞いておけばよかった、と後悔した。
「おい、武登、見世物じゃないんだ！　下がれ！」
バットを担いだ野球部員の一人が克磨に怒鳴った。バットの銀色が太陽光に照って眩しい。
「そうだな、悪かった。晩家（くれにけ）さん、ほら」
庇護するように私の名を呼んだように感じた。繋いだままの手を引いて、私を問題の外へと導いた。
輪の外へ出ると、救急車の音が低く聞こえてきた。その音はだんだんと高くなった。

三

救急車が女の子運んでいき、その場に残ったのは野球部員が一人と私と克磨。救急車の音が聞こえなくなると、克磨がにわかに私のそばから離れて、野球部員に近付いていった。よくわからないまま私は克磨に従った。

「大条（だいじょう）。話を聞いてもいいかな？」

克磨はその野球部員の肩を後ろから叩いて聞いた。大条と呼ばれた野球部員はしかめた顔を向けた。さっき克磨に対して下がれと怒鳴った人だった。相変わらず担いだ金属バットが太陽光でちかっと光ったりする。

「おまえ、首突っ込むなよな。こっちはもうすぐ夏大だってのに、面倒は嫌だ」

「そう言うなって。ちょっと気になるんだ」

克磨は不敵に笑んだ。

「池幡（いけはた）さんはどうして救急車で運ばれることになったんだ？」

克磨が言った池幡さんとは、確か野球部のマネージャーだった気がする。いっしょのクラスになったことはないけれど、元気な女の子でにぎやかだから、よく彼女の噂は耳にする。会ったことはほとんどなかったため、運ばれていった女の子が彼女であることには気付かなかった。

「事故だよ！　頭に大怪我をしたんだ！　それがどうかしたのかよ！」

「いや、べつに。で、何があったんだ？」

やんわりと怒鳴り声をスルーする克磨に、大条くんはため息をついた。

「……伏垣（ふしがき）がさ、投球練習中に誤って池幡の頭にボールぶつけちまったんだ」

伏垣くん？　伏垣くんとは去年同じクラスだった。小柄で寡黙な

人だ。時々坊主頭にしてくることを不思議に思っていたが、野球部ならば合点がいく。
「ふーん。こんなところで？」
楽しそうに克磨は言及する。楽しそうにというのはいささか不謹慎であるが、克磨の抱いた疑問は私も抱いた。野球部なら普通はグラウンドで練習しているはずだ。こんなところで練習中の事故が起こるなんてことがあるのだろうか？
「伏垣が投球練習するときはいつもここでしてたんだよ。ブルペンが人数分ないからさ。伏垣のやつ補欠だからって遠慮してたんだ。遠慮ついでにあいつはここで練習するってみんなには言ってない。まあ、みんなそう気にしてないからいいんだけどな」
伏垣くんらしいといえばらしい。私の記憶にある伏垣くんは、いつでも一歩相手に譲るような人だった。話しかければ笑顔を見せてくれる人でもある。
「それで、なんで池幡さんがここにいたんだ？　彼女は伏垣くんがここで練習していることを知ってたのか？　それよりも、夏の大会が近いんだろ？　補欠はいいとして、マネージャーがグラウンドを離れていいのか？」
「……いちいちおまえは気に障る言い方するよな」
「気のせいだろう」
大条くんの表情が険しくなったのがわかった。悪びれもせず言う克磨に、ちょっと私もいらっときた。
「池幡は知ってたよ。気付いたらいなくなる伏垣を不審がって問い詰めたらしい。二人は同じクラスだから言い逃れられなかったんだろう。それで時々様子を見にいってもらって、ついでに投球練習の相手をしてもらってたんだ。あと、今日はマネージャーたちには道具の手入れをしてもらってたから、一人ぐらい減っても平気だったんだ」
「手入れって？」
「ヘルメットとかメガホンとかの点検だよ。バットとかボールとか

もだ。使えそうなやつの数を調べてもらって、汚れてたら綺麗にしてもらうんだ」
「ふーん。それで、事故が起こったその後は？」
質問の意味はなかったのか！　と怒鳴りたくなるほど淡白な様を見せる克磨だった。大条くんは呆れ感を溜息一つで表した。
「伏垣は俺にまず伝えにきたんだ。池幡の頭にボールをぶつけて気を失わせてしまったってな。だから、まず先生に伝えにいかせて、俺は池端のもとへむかったんだ」

四

金重光羽（かなしげ みつは）さんは、一年生のときに同じクラスだった。諦観したような眼差しをしながらも、体育の時間では他の人より活動的だった記憶がある。なるほど、体育会系だったのか。

彼女も伏垣くんがここで練習していることを知っていた。池幡さんが伏垣くんを問い詰めたとき、いっしょにいたらしい。金重さんもクラスメイトだとか。

「校舎裏に着くと、血を流して横たわってる池幡を見付けたんだ。それから間もなくして道具の点検をしていたマネージャーの一人である金重もやってきた」

そう大条くんは説明を続けた。

金重さんはバットが一つ足りないことに気付き、池幡さんか伏垣くんが知っているんじゃないかと思ってきたらしい。

「バット？　そのバットは見付かったのかい？」

克磨の問いに、「さっきまでの騒ぎがあれば、見付かってないことぐらいわかるだろう。探してすらいないんだから」と大条くんは返した。

「それもそうか。盗難じゃなきゃいいな」

そんな心配をしていたらしい。

「ああ。……まったく、大会近いのに面倒なことになりやがって」

大条くんは舌打ちをする。どうやらお話は終わりらしい。でも、あれ？

「そういえば、伏垣くんは？」

口をついて出た。克磨と大条くんが私のことを見る。これまで私はその場にいながらにしていなかったようなものだけに、二人からしてみれば意外であったのだろう。でも、仕方ないじゃないか。最初から今まで、その伏垣くんを見かけていないことに気付いていし

まったのだから。
「ふーん。そういえばそうだな」
「伏垣なら生徒指導室だよ。顧問にそのまま話を聞かされてる」
言われてみればあたりまえか。
「じゃあ、あとで伏垣くんにも話を聞いてみようかな」
ぼそり、と克磨は言った。思わず聞き逃してしまいそうだった。
「ちょい待てよ、武登！　何しようとしてんだ？」
大条くんが憤然たる様子で克磨に迫った。私もなぜそこまでするのかわからず、克磨の口元を見た。
「何って、もっと詳しく聞きたいからだよ」
「話しただろう！　伏垣の気持ちを考えてみろよ！　おまえ、楽しんでるだけじゃねーか！　いいかげんにしろよ！」
マシンガンのごとく大条くんは克磨を怒鳴った。……大条くんの言い分ももっともだし、これから私が克磨に言って聞かせようとしたことだけど……さすがに克磨がかわいそうになった。
「うるさいな。野次馬根性って言葉知ってるか？　日本人特有の性質の悪い性質だ」
思考改正。やはり克磨は悪く言われて仕方ない。コウイウ子ニハ、仕方アリマセンッ！
「たわけがっ！」
なっくるッ！　捻れを加えた左ストレートを、軽く克磨の右頬に喰らわせた。もんどりうって克磨は仰け反った。ザマァミロ。
「何すんねん！」
「黙っとけっ！　もっと君は人の気持ちがわかるようになりんしゃい！」
「オマエこそ人の痛みを知れ！」
「嫌な思い出を掘り起こされるのは嫌でしょ！　わかった！」
「ブーブー！」
我ながら頭悪いやりとり。ほら、大条くん退いてるし！　なんだか目線が冷たい……！　咳払いをしてみる。

「か、克磨は私が止めときます。お騒がせしました！」
むんずと首をぞ捕まえて克磨に一礼させると、そのまま引っ張っていった。恥ずかしくて大条くんの表情なんて伺えなかった。
「はーなーせーやー！」
「あーほーいーえー！」
こうして私と克磨は大条くんの前から退場した。

して、部室。膨れっ面の克磨と二者面談のように向かい合っている。
「まったく。君はいつもマイペースというか自己中というか。むしろ事故中？」
「うるさいな。オマエには関係ないだろう」
「うるさいな。いっしょにいる人の身になってみろよ」
克磨は頬杖を突いてそっぽうを向いた。
「そういえばさ、大条くんとは友達なの？　話してるところを見たことないけど？」
「それはオマエの間が悪いからだろ。アイツとは三年間同じクラスなんだよ。アイツは強打者でさ、うちの野球部の四番らしいんだ。それでキャプテン」
なるほど、だから威圧感のようなものがあったのか。
「ありえないと思うんだ」
ぽつり、克磨は呟いた。何か大切なことを言うとき、いつも突然、独り言のようにして彼は言いこぼす。
「何が？」
「硬球とはいえ、帽子を被った頭にボールがあたったぐらいじゃ、あそこまで出血するとは思えないんだ」

五

「帽子っていうのは、一般的に思われている以上に頭を守るのに役立つんだぞ」
克磨（かつま）は言う。
「プロのピッチャーのボールならわかるとして、地区大会一回戦止まりのうちみたいな野球部に、そこまで威力あるボールを、しかも補欠投手なんかが投げられるとは思えない」
あからさまに酷いことを言っているが、克磨の意見には一理ある。伏垣（ふしがき）くんは小柄で、そう速いボールを投げるようには思えない。
「君は、何が言いたいんだ？」
「池幡（いけはた）さんが気を失った原因は、ボールなんかじゃない。もっと他のもの。もっと殺傷力のあるもの」
剣呑な単語が飛び出し、思わず苦笑いを浮かべてしまった。
「殺傷力ってなんだよ？　まるで殺意があったみたいじゃないか」
私が言うと、克磨は「殺意ねぇ」と興味なさそうに言った。
「殺意は、まあ、あったのかな」
さりげなくトンデモナイこと言ったぞ、コノ子？
「何言ってんの？」
「最初は事故だったんだと思う。だけど、最終的には事故だけじゃなかったんじゃないかな？」
克磨の言っていることはよくわからなかった。最初は事故で、それから何かが起こったとでも言うのだろうか？
「だってさ、だって……まあ、ボクが今言ったボールによって出血が起こっていないとすればだよ、いったいどうして池幡さんは出血していたんだと思う？　それも頭部周辺の地面一帯にも及ぶほどに？」
「それは……」
もっと力のある何かで殴られたから？　でも、何で？

「思い浮かばないだろう？　倒れたときに頭を切ったって言うのも考えられるけど、出血は帽子で守られている個所からだった」
　そんなものを確認していたのか、コノ子。
「それに、そうだとしたらわからないことがある。何かで殴ったとして、血がその何かについてもおかしくない。何かから血が地面に滴り落ちてもおかしくない。辺りにも血の跡が残っていてもおかしくない。だが、なかった」
　そう言われて試しに思い返してみると、確かに血は彼女の頭部周辺にしか見られなかった。かつ、あの校舎裏で不自然に血のついていたものはなかった。
「殴った何かがあるはずだけど、あの場所にはなかった。隠したのか持ち去ったのか」
　校舎裏にはものを隠すような場所はなかった。それに校舎裏へ通じる校庭からの通路もしかり。ただの一本道だから隠すような場所はない。
「持ち去ったのかな？」
「これぱっかりは伏垣くんが離れて、大条（だいじょう）がやってくるまでどれくらい時間があったのか次第だからな。でもまあ、持ち去ったらどこかしらに血の跡は残るだろうから、たぶんないだろうけどね」
「えっ？　じゃあ、君の考えはそこでストップじゃないか」
　堂々巡りをはじめている。克磨は考えすぎなだけで、本当のところボールが原因でしかないのではないのだろうか？
「例えば血を拭ったとか」
　克磨は目線だけをこちらに向けた。私は思わず背を正した。
「でも、何で？」
「着ていた服とか」
「ナンセンス。血がついていたのは池幡さんの帽子だけだよ」
「雑巾とか」
「なんで？」
「なんとなく」

克磨はそっと立ち上がり、背伸びをした。
「ちょっとゴミ捨て場にいってくる」
突然そんなことを言ったかと思うと、早速実行に移していた。
「ちょっと待ってよ！　私もいく！」
「来てもいいけど、オマエには他にやってもらいたいことが今浮かんだ」
なんだかちぐはぐな言い方をする。私は首を傾げながら、「それって、ついてくるなってことでしょ？」と聞いた。克磨は頷くと、「伏垣くんを足止めしてくれ」と言った。
「もうそろそろ伏垣くんは解放されてるだろう。もういなかったら仕方ないけど、いるんならボクが戻ってくるまで生徒指導室の前で留めておいてくれないか？」
簡単だろう？　そんな顔をした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6983x/

校舎裏のツギハギ感

2011年10月28日13時29分発行